栞集を読む

松岡　隆子

伸びながら傾きながら風信子　　梶浦　道成

一読して調べの良さと〈風信子〉に惹かれた。上五中七のリフレインが流れるように〈風信子〉に繋がっていくリズム感。〈伸びながら傾きながら〉は写生でありながら抒情的だ。ヒヤシンスの傍題である〈風信子〉がその抒情を深めている。伸びるにつれて花の重みで傾ぐ様は、風のたよりを待つかのようにも思える。

やがて落つ重さとなりぬ花椿　　平沢千恵子

今咲いたばかりの大輪の赤い椿、その瑞々しい美しさにみとれながらも作者はいま、その美しさには限界があることを感じている。その美しさを保つために、完結の赤さを以て椿は落ちてゆく。一字の無駄もない措辞がもたらす一句の緊張が下五の〈花椿〉に集約されている。下五を「椿かな」と置き替えてみると〈花椿〉がいかに効果的であるかが分かる。

啓蟄や道路工事の灯のふえて　　中谷　信子

啓蟄は二十四節気の一つで、太陽暦で3月5日ごろに当たる。自然界では冬の間地中に眠っていた虫たちが穴から出てきて活動し始める。街ではあちこちで急に道路工事が始まる。年度末の三月に見られる社会現象の一つを啓蟄にぶつけたところに俳句の目線を感じる。〈灯のふえて〉の確かな把握が一句を立ち上げている。

退院を待つや薔薇の芽数へては　　梅澤　惇子

同時句に〈病み伏せし夫に告ぐるや窓の雪〉がある。一時体を起こして窓の雪を見るのは困難な病状だったようだが、徐々に快方に向かわれ退院も間近という。退院を待つ心躍りに芽吹き始めた薔薇の芽を数える。美しく咲いた薔薇を眺めながら、平穏な二人の時間を過ごせるはずだった。

その後の句会で〈この椅子に戻る人なき遅日かな〉を見て絶句した。寂しさを振り払って句会に出席されている梅澤さんに、俳句が力となってくれることを祈りたい。

片す書に開かぬ頁花曇　　河本　順

世は断捨離の時代、書物とて例外ではない。書棚にあふれる本を整理しなければと思い立ち、要らない本を選り分けていく。そのうち読もうと思いながら終に頁を繰ることのなかった本も何冊かある。多分これからも読まないだろうと思う本は処分用の段ボールに入れる。わが部屋の隅を占領して